

『元朝秘史』の成立過程に関する覚書——漢字音訳原本とその改訂

中村雅之

1. 陳垣の研究

現存の12巻本および15巻本の『元朝秘史』(以下『秘史』)が種々の改訂を経たテキストであることについては、つとに陳垣(1934)の詳細な考証がある。その最終章「元秘史漢訳時代」の中で、『秘史』の音訳法の特徴を『華夷訳語』(甲種本)と比較して、次の四点にまとめている。¹

- ①音訳字に意味の要素を加味すること(『華夷訳語』が「山」を意味する語を「阿兀刺」とするのに対して、『秘史』では「阿兀刺」とするなど)
- ②過去形接辞「巴-ba」「別-be」「伯-bai/-bei」などを一律に「罷」に改めたこと
- ③音節末音/-r/を表す「児」を「^舌児」としたこと
- ④音節末音/-l/の表記法を、左肩に「丁」を付す方法から右下に「勒」を付す方法に変えたこと(/ul, ul/は『華夷訳語』で「温」、『秘史』で「温勒」「兀勒」)

陳氏は以上を根拠として、『秘史』の漢訳が『華夷訳語』よりも後であると結論づけたのであるが、服部(1946:132頁)が評したように、上の状況は『秘史』の改訂が『華夷訳語』より後であることを示すとしても、『秘史』の漢字音訳原本が『華夷訳語』より後であることは証しえない。しかしながら、『秘史』の現行テキストが多くの改訂を蒙っていること、その漢字音訳原本の音訳法が『華夷訳語』とほぼ同じ方法によっていることを示した点において、陳氏の功績は大であった。

2. 村山(1961)の貢献

『秘史』の漢字音訳原本(以下「原本」と略称)の性格を考える上で、陳氏に次ぐ貢献したのは村山七郎氏である。村山(1961)は、与位格語尾/-dur, -dür, -tur, -tür/が巻1・巻2と巻3以降とで全く異なる原理によって表記されていることを示した。村山氏のこの発見は後に栗林(2002)においてより精密化されたため、今その成果をも含めてまとめれば、12巻本の巻1と巻2(以下「A群」とする)において、与位格「突児/途児/図児」は音声ではなく意味・用法によって書き分けられており、一方、巻3以降(以下「B群」とする)

1 以下に『秘史』モンゴル語のローマ字表記を示す場合は「ba」のように示し、転写法は栗林・确精扎布(2001)の方法による。特に音声を問題とする場合には/r/のように音素表記とする。以下同。

では完全に音声的な条件によって書き分けられている。すなわち、A群においては、(i)「突児」は時を表し(傍訳「時・時分」)、(ii)「途児」は方向を表し(傍訳「行」)、(iii)「囟児」は場所を表す(傍訳「裏」)。一方、B群においては、母音・二重母音および子音「-n,-ng,-l,-m」の後では「突^平児」と表記し、子音「-γ,-b,-s,-d,-g,-r」の後では「途^平児」もしくは「囟^平児」である。またB群においても、「途^平児」と「囟^平児」の区別にはA群の方法(つまり上の(ii)と(iii)の書き分け)が用いられている。

村山(1961)はA群における音訳法が『華夷訳語』にも共通して見られるものであり、B群における音声による音訳法よりも古い原理であるとした。そして---本稿ではこの点が最大の論点となるが---A群とB群とが異なる時期に成立したと結論づけた。古い音訳原理をもつA群が先に成立し、B群が後に成立したというもので、一見妥当な結論に見えるが、ここでも服部(1946)が陳説を批判したのと同様の批判がなされるべきであろう。A群とB群とに音訳法の新旧の違いがあることは、B群における改訂の事実を示すものではあっても、それによってB群(の原本)がA群より後に成立したことを証しない。本誌前号に寄せた拙稿(中村2009)では、A群の音訳法が原本では全巻において行われ、B群の音訳法は後の改訂を反映するものと仮定した。これについては他の関連する事項を指摘してから、再度振り返ることにしたい。いずれにせよ、村山氏の発見が原本『秘史』の考察にとって重要な鍵となるものであったことは疑いない。

3. 小澤(1994, 1997)によるA群とB群の分析

小澤(1994:204-226頁)および小澤(1997:92頁)ではA群(巻1・巻2)とB群(巻3以降)それぞれの特徴を挙げ、さらに『華夷訳語』の状況をも考慮して、原本『秘史』から現行本への成立過程を推定した。

小澤氏の挙げるA・B両群の特徴は以下の通りである。

- ①与位格/-dur, -tur/等をA群は意味により、B群は音声によって書き分ける。
- ②使役形接辞「-ul/-ül-」をA群でほぼ「-温勒-」、B群で「-兀勒-」とする。
- ③音節末音/-r/をA群で「-児」、B群で「-^平児」とする。
- ④実詞再帰格語尾をおおむねA群で「-巴安/-別延」、B群で「-班/-邊」とする。
- ⑤A群でのみ「古」を/qu~γu/にも用いる。B群では/gü/(時に/kü/)に限定。
- ⑥仮定副動詞形をA群で「-巴速/-別速」とし、B群で「-阿速/-額速」とする傾向。
- ⑦過去時制「-ba/-be/-bai/-bei」がA群「罷」、B群「罷原作別/罷原作伯」など。

いずれもA群の方が古い表記法と見なされる。さらに、現行本『秘史』には見られず、『華夷訳語』に見える特徴(=原本『秘史』の特徴)として、

⑧過去時制語尾を「巴・八-ba」「別-be」「伯-bai/-bei」で表記。

⑨副動詞形語尾「-ju/-ču」を区別せず「周」で表記。(現行本は「周/抽」と区別)

⑩「^ㄊ温-ul」のように、「^ㄊ」を用いて音節末音/-l/を表す方法。

を挙げる。⑧の「巴」「別」は現行本『秘史』にも10例余り残存しており、その大半がA群に集中している。現在確認している限りでは、B群での使用は巻3と巻8に1例ずつ(ともに「別」)にとどまる(巻数は12巻本による)。また、⑨の「-ju/-ču」の区別とは、子音「-γ, -b, -s, -d, -g, -r」の後で「抽-ču」を用い、その他の場合で「周-ju」を用いるものである。『華夷訳語』ではこれらを区別せずにほぼ全面的に「周」を用いる(「抽」は1例のみ)ことから、原本『秘史』でも「周」のみを用いていたものと推定された。以下のような例は、あるいは原本における表記の残存であるかも知れない。「ög-ču(傍訳「与着」)」の表記は通常「斡克抽」である(22例)が、「斡克周」が2例(巻1・巻4)ある。また、「qar-ču(傍訳「出着」)」に対して「^ㄇ合兒抽/^ㄇ合^ㄆ兒抽」33例のほか「^ㄇ合兒周」が1例(巻2)、そして「gür-ču(傍訳「到着」)」に対して「古兒抽/古^ㄆ兒抽」47例のほか「古兒周/古^ㄆ兒周」が2例(巻1・巻6)見える。これらの「周」は音声的な条件に反するが、原本の残存と考えれば納得できる。

小澤氏は村山(1961)と同様に、A群とB群が時期を異にして成立したと考えた。この点について私は異なる見解をもつものであるが、原本から現行本までの改訂作業を具体的に跡づけようとした点に小澤氏の本領がある。小澤(1994:224-225頁)では次のような段階を想定した。(いま略記し、『華夷訳語』との関係部分も省略する)

「巴字本秘史」巻1・巻2 → 「準巴字本秘史」巻3以下 → 現行本「秘史」

最初の「巴字本秘史」は上記⑧の特徴をもつ故に「巴字本」と称されている。要するに原本『秘史』と言ってもよいが、小澤氏の想定では巻1・巻2のみがまず成立したことになる。次の「準巴字本秘史」で、上記①⑨⑩に関する方針変更が行われたという。なお、小澤(1997)では上の想定を大きく変更し、「準巴字本秘史」は存在しなかったとしているが、A群のみが先に成立したという部分には変更はないようであるから、今はこれ以上小澤説に立ち入らないでおく。

4. 巻2の冒頭二節(§69・§70)の特殊性

栗林(2003:xiii-xiv頁)には、巻2の冒頭の二節(§69と§70)がA群の中にあつてB群と共通する二つの特徴をもつことが示されている。一つはモンゴル語の音節末/-r/を記す場合に、A群では「兒」とし、B群では「^ㄆ兒」とするが、§69・§70でも「^ㄆ兒」であること。もう一つは、過去時制語尾「罷」の下にB群では「原作別」「原作伯」などの注が

頻繁に見られ、A群では見られないが、§ 69・§ 70には例外的に「原作別」「原作伯」の注が見えることである。

このほかに、§ 70に「^甲豁只荅兀兀勒荅周(qojida' u' ulda=ju、傍訳「被落後了着」)」として、使役形接辞/-ul-/を「温勒」ではなく「兀勒」と表記しているのもB群と共通する特徴である。

さて、A群の中にB群の特徴をもつ部分が含まれているという事実は、A群が先に出来て、B群が後に成立したという村山・小澤説にとって不利である。少なくともA群の全てが古い特徴をもっているのではない。また § 69と § 70の存在は、『秘史』の改訂がB群においてのみ行われたのではなくて、A群を含む『秘史』全巻で行われたことを強く示唆する。§ 69・70はその残存部分である。

かつてHung (1951:461頁)は、過去時制語尾「罷」に「原作別」「原作伯」などの小字の注を施す作業は、『秘史』の巻末から巻頭に向かってなされ、巻2の冒頭部分を終えた段階で中止されたという説を立てた。その説はあまりにも奇抜で受け入れがたい。むしろ現行テキストは何らかの事情によって、古いヴァージョンと後のヴァージョンの混合したものであると考える方が無理がない。何らかの事情とは、例えば、改訂版の巻1と巻2の大半が欠落してしまい、古い写本でその欠落部分を補ったというようなことである。巻2の冒頭の二節は欠落を免れたためにB群と同じ特徴をもっていると考えられる。この仮説に有利なのは、欠落を免れた § 69と § 70が15巻本においてちょうど巻2の最初の一葉に相当するということである。A群の中でその一葉だけが残ったと考えるならば、なぜ § 69と § 70の二節だけが特殊なのかという説明も付く。

いま仮に、『秘史』の漢字音訳原本をα本とし、「巴・八・別・伯」を「罷」に改めたヴァージョンをβ本、さらに「罷」に「原作別」などの注を加えたヴァージョンをγ本と呼ぶことにすると、私が想定しているのは次のようなことである。巻1・巻2(§ 69・70を除く)がβ本の残存部分であり、巻2の冒頭二節(§ 69・79)および巻3以降がγ本であって、α本の本文(モンゴル語部分)は現存していない。

5. 巻8の特殊性

吉池(2003)では、山名「Burqan-Qaldun」の音訳字について興味深い報告がなされた。「Burqan」は「不児罕」あるいは「不帆罕」と表記される(「帆」には時に小字の「舌」が付されることがあり、「罕」には時に小字の「中」が付される)が、/r/に当てた「児」と「帆」の分布が問題となる。モンゴル語本文においてこの語は全27例が確認され、巻2を除いて全て「帆」であるが、巻2においては「帆」6例のほかに「児」が5例ある。そして総訳

部分を見ると、巻1、巻2、巻8においては全て「児」で、他の巻では全て「岨」である。要するに、巻1と巻2(すなわちA群)に「児」が集中して表れるほか、巻8の総訳にも「児」が用いられるのである。つまり以下のような状況にある。

	巻1	巻2	巻3～4	巻5～7	巻8	巻9	巻10～12
本文	岨	岨/児	岨	なし	岨	岨	なし
総訳	児	児	岨	なし	児	岨	なし

「不見罕」は『華夷訳語』にも見える表記であるから、原本『秘史』(= α本)の表記でもあったと考えられる。「不岨罕」は山名であることを考慮して山偏を用いた表記であり、より新しい表記である。巻8の総訳部分ではA群と同様に「児」が用いられているのであるから、古い表記を残していることになる。つまり、巻8は本文においては改訂を経た表記「不岨罕」が確認でき、総訳部分においては逆にA群と共通する古い表記が見られるということである。

吉池氏によって発見された巻8総訳部分の特徴は、単に「不見罕」だけではなく、より広く音節末音/-r/の音訳法の問題として捉えることが可能である。音節末音/-r/は、すでに述べたように、一般にA群では「児」であり、B群では「^ㇿ児」である(いま「岨」のような意味を考慮した表記は無視する)。これはモンゴル語本文においてのみならず、総訳部分に関しても言える。総訳の中にモンゴル語の固有名詞が表れる時、/-r/については、やはりA群では「児」であり、B群では「児」のほか「^ㇿ児」も頻繁に用いられる。そして巻8においてはA群と同様に「^ㇿ児」は一例も用いられないのである。

この状況をもっとも合理的に説明するには、やはりここでもγ本の巻8に欠落が生じ、古いヴァージョンで補ったという仮説が有効である。ただし、巻1・巻2の場合と異なり、巻8については古いヴァージョンで補完したのち、その本文だけをγ本に合わせて校訂した。総訳は校訂対象とならなかったために古い特徴が残ったと考えられる。

巻8本文がγ本よりも後に校訂されことは与位格の表記法によっても裏付けられる。中村(2009)では、与位格語尾の音訳法について、現行本のA群に見られる方法(意味による書き分け)が初め『秘史』全巻で行われ、後に現行本のB群に見られる方法(音声による書き分け)に改訂されたと論じた。その際の改訂は「途児」「図児」のうち、有声音であるべきものを「突^ㇿ児」に改めるというのが主な操作であった。その結果、無声音/-tur, -tür/については古い音訳法(意味による書き分け)が残った訳である。しかし、栗林(2002)の指摘するように、『秘史』全巻を通じて見られる「途児・途^ㇿ児」と「図児・図^ㇿ児」の書き分け(前者が傍訳「行」に、後者が傍訳「裏」に対応)が巻8には見られない。巻8においては「図^ㇿ児」が用いられず、有声音/-dur, -dür/を「突^ㇿ児」と表記

し、無声音/-tur, -tür/を「途^𑖅児」と表記するという原則がほぼ徹底されている。γ本では与位格語尾を音声によって書き分けるという方針を立てたが、無声音に対する二種の表記「途^𑖅児」と「𑖅^𑖅児」(α本において意味の区別に用いられたもの)を敢えて統一しなかった。ところが巻8においてのみ、それが「途^𑖅児」に統一されているのである。これはもつとも革新的な音訳と言えよう。

6. まとめ

以上に述べたことをもとに、『秘史』の漢字音訳原本から現行本までの想定される流れをまとめると次のようになる。

(1) 漢字音訳原本(= α本)

「巴・八・別・伯」「児-r」「𑖅温-ul-」「周-ju~-čü」「与位格語尾の意味による区別」

(2) β本 「罷」「温勒-ul-」「周-ju/抽-čü」

(3) γ本 「罷原作別」「𑖅児-r」「兀勒-ul-」「与位格語尾の音声による区別」

(4) γ本の巻1・巻2(冒頭二節を除く)・巻8に欠落を生じる

(5) 欠落部分をβ本で補完し、巻8については本文部分をγ本に合わせて校訂

以上が私の想定であるが、(5)においてなぜ巻8のみが校訂されたかなど、十分に説明しきれない部分もある。

なお、原本たるα本はすでに見られないのであるが、総訳部分については、永楽二年の写本とされるものが陳(1934)に紹介されており、そこに/-ul/を表す「𑖅温」の表記が見えることから、α本からの写しである可能性がある。

<参考文献>

陳垣(1934)『元秘史訳音用字攷』, 中央研究院歴史語言研究所。(台湾影印本による)

服部四郎(1946)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』, 東京:文求堂.

Hung, William(1951). The Transmission of the Book Known as the Secret History of the Mongols. *HJAS*,14.

村山七郎(1961)「華夷訳語と元朝秘史との成立の先後に関する問題の解決」『東方学』22.

小澤重男(1994)『元朝秘史』, 岩波新書346, 東京:岩波書店.

小澤重男(1997)「『元朝秘史』原文における「罷原作伯」についての覚書」『日本モンゴル学会紀要』27(1996).

栗林均・确精扎布(2001)『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』, 仙台: 東北大学東北アジア研究センター。

栗林均(2002)『「元朝秘史」と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について』『言語研究』121.

吉池孝一(2003)「元朝秘史の区分と音訳漢字の分布」『KOTONOHA』6.

中村雅之(2009)『「元朝秘史」成立の一断面---与位格-dur/-turの分析』『KOTONOHA』85.

< 補(2010.2.23) >

脱稿後、栗林均氏の『「華夷訳語」と『元朝秘史』におけるモンゴル語の動詞過去形語尾=ba/=be,=bi,=bai/=beiを表す漢字について』(『東北アジア研究』9, 2005)を読んだ。参考となる点が非常に多い。

本稿の3頁に「⑧の「巴」「別」は現行本『秘史』にも10例余り残存しており、その大半がA群に集中している。現在確認している限りでは、B群での使用は巻3と巻8に1例ずつ(ともに「別」)にとどまる(巻数は12巻本による)。」と記したが、栗林論文には詳細な調査結果が表としてまとめられている。それによれば、動詞過去形に「巴」が用いられるのは全7例(すべてA群)、「別」は全12例(A群7例、巻3・5・7・8・10に各1例)、「伯」は1例(巻1)である。

また、栗林氏によれば、B群においては第一段階として「八」「巴」のみが「罷」に改められ、後の段階で「別」「伯」が「罷原作別」「罷原作伯」に改められたという。B群に「八」「巴」の残存形がなく、「罷原作八」「罷原作巴」がごく少数(全5例)見えるのは、第一段階で書き換えから漏れた「八」「巴」を後の段階で書き換えたと考えれば納得できる。従うべきであろう。本稿の結論とも大きな矛盾はないようであるが、その整合性についてはじっくり検討してみたい。